

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十二）：「折楊柳」七首
Author(s)	小川, 恒男
Citation	中國中世文學研究 , 70 : 97 - 117
Issue Date	2017-09-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044519
Right	
Relation	



六朝樂府詠注（二十二） — 「折楊柳」七首 —

小川恒男

はしがき

『樂府詩集』卷二十二には六朝期の漢横吹曲「折楊柳」十首を収める。十首の詠注を一度にまとめて掲載できればよかつたのだが、例の如く自身の怠惰のために時間に追われることになってしまい、前稿に梁元帝の「折楊柳」一首のみを、本稿には梁簡文帝一首、劉邈一首、陳後主二首、岑之敬一首、徐陵一首、張正見一首を掲載した。次稿に王瑳一首、江総一首を掲載する予定である。

梁元帝の「折楊柳」は他の九首と比べてみると、些か趣きを異にするように感じられる。巫峡の柳から歌い興すこと自体が珍しいし、前半四句と後半四句とは歌い手が演じる役が異なっており、三峽を上り下りする夫と故郷に在って孤閨を守るその妻との情愛を詠じて、内容的にはずっと後に作られた劉禹錫の「竹枝詞」に似ている。蕭繹が湘東王として江陵の地に本拠地を置いていたことが、元帝「折楊柳」の特殊性に少なからぬ影響を与えたと考えてよいだろう。徐陵が「江陵有旧曲（江陵に旧曲有り）」と詠じた時、やはり元帝の「折楊柳」を脳裡に浮かべていたのではなからうか。

また、陳後主の作に「倡園妾屢驚（倡園 妾 屢しば

驚く）」と六朝詩では他の用例があまり見当たらない「倡園」の語が、江総の作にも「不悟倡園花、遙同天嶺雪（悟らず 倡園の花の、遙かに天嶺の雪と同じきを）」と見えることから、江総の「折楊柳」が奉和の作だった可能性は大きいと考えられる。

「折楊柳」に限らず六朝詩の多くは繫年が難しく、ある作品がその詩人によつていつ、どこで作られたのか、なかなか分からない。そのため、右に述べたような影響関係を立証するのもまた困難である。今は作品を丁寧に読み解いていき、影響関係の痕跡をひとつずつ見出ししていくしかないだろうと思う。

佐藤大志氏「梁陳の『折楊柳』 — 『攀折』の『折楊柳』 —」（本誌第60号 二〇一二）は六朝詩中に描かれる「折柳寄遠」「折柳贈別」という二つのモチーフについて詳細に論じており、本稿を作成する際、大いに参考にさせて頂いた。
底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

梁・簡文帝「折楊柳」

- 【本文及び書き下し】
- 1 楊柳乱成糸 楊柳 乱れて糸を成し
 - 2 攀折上春時 攀折す 上春の時
 - 3 葉密鳥飛礙 葉 密にして 鳥 飛びて礙さまたげられ
 - 4 風輕花落遲 風 輕くして 花 落つること遅し
 - 5 城高短簫發 城 高くして 短簫 發おこり
 - 6 林空画角悲 林 空しくして 画角 悲し
 - 7 曲中無別意 曲中 別意無く
 - 8 併是為相思 併ひらびに是れ相ひ思ふと為す

【日本語訳】

- 1 ヤナギの枝が伸びて糸のように乱れ
- 2 その枝に手をかけて折ったのは初春のこと
- 3 その頃は葉がみっしりと茂って鳥が飛ぶのを邪魔し
- 4 風が穏やかでヤナギの花がゆつくりと散っていた
- 5 この辺境の砦は高いところにあつて短簫のしらべが聞こえてきた
- 6 林には人の気配がなく、画角の音色がもの悲しい
- 7 それらの曲は他でもない
- 8 どちらも恋人を思う心情を歌うのだ

【校勘】

○『芸文類聚』卷八十九・『文苑英華』卷二百八・『古詩

紀』卷八十・『玉台新詠』卷七

- 0 「折楊柳」、「玉台」『詩紀』並作「和湘東王横吹曲三首折楊柳」。『類聚』作「折楊柳詩」。
- 「簡文帝」、底本作「柳憚」、「詩紀」注云「樂府」作「柳憚」者非」。今拠『玉台』『類聚』『英華』改。
- 7 「無別」、底本作「別無」、「英華」同。拠『玉台』『類聚』改。
- 8 「是為」、「玉台」作「為久」。『英華』作「為一」、而「為」下注云「一作『是』」。

【押韻】

「糸」「時」「思」、上平七之韻、「遅」「悲」、上平六脂韻。脂・之同用。

【作者】

五〇三〜五五一。武帝蕭衍の第三子、南朝梁の第二代皇帝。在位五四九〜五五一。名は綱、字は世績。昭明太子蕭統の弟。昭明太子が早世すると後を継いで太子となつた。侯景の乱で建康が陥落した後、餓死させられた武帝に代わり、侯景によつて即位を強制されたが、実権は侯景が握り、単なる傀儡に過ぎなかつた。五五一年、侯景を討とうとする王族たちの軍に敗れた侯景は、建康に帰還するや簡文帝を廢して元の晋安王とし、皇太子を始めとする簡文帝の子供たちを抹殺し、昭明太子の孫でまだ幼かつた予章王蕭棟を位に即けた。その二ヶ月後、晋

安王蕭綱は侯景に殺された。

彼は自らも詩文に優れ、十八年間に及ぶ太子時代を中心、徐摛・徐陵父子、庾肩吾・庾信父子などを集めて文学サロンを形成した。彼らの軽妙な詩風は「宮体」と呼ばれた。また多くの恋愛詩を集めた『玉台新詠』は彼の命で編集されたものである。

【語釈】

1 楊柳乱成糸 2 攀折上春時

「楊柳」ヤナギの総称。『詩経』小雅・采薇に「昔我往矣、楊柳依依（昔 我 往きしとき、楊柳 依依たり）」と。「柳」は枝垂れ柳、「楊」は枝の垂れないものを用いる。

「乱成糸」柳の枝が盛んに伸びて、糸のように秩序がなくなる。「糸」は繭から紡いだだけの細い糸。「成糸」は髪がぼさぼさになることの比喩に用いられる。梁・范雲「当对酒」に「方悦羅衿解、誰念髮成糸（方に羅衿の解かるるを悦ぶも、誰か念はん 髪 糸を成すを）」とある。また、梁・沈約「春詠」詩（『玉台』巻五）に「楊柳乱如糸、綺羅不自持（楊柳 乱ること 糸の如く、綺羅 自ら持せず）」と類似表現が見られる。

「攀折」枝に手をかけて手折る。漢・淮南王劉安「招隱士」（『楚辞』）に「攀援桂枝兮聊淹留。（桂枝を攀援して聊か淹留す。）」とあり、会うことが難しい人物を描写するのに用いられる。「古詩十九首」（『文選』）巻二

と見える。「輕風」の語は早く晋・張協「雜詩」十首（『文選』）巻二十九）其四に「輕風摧勁草、凝霜竦高木（輕風 勁草を摧き、凝霜 高木を竦かす）」に見えるが、疾い風の意で用いる。齊梁期になると穏やかな風の意でも用いるようになったようである。

「花落遲」花がはらはらとゆつくり散る。「花落」は齊・謝朓「遊東田」詩（『文選』）巻二十二）に「魚戲新荷動、鳥散余花落（魚 戯れて 新荷 動き、鳥 散りて 余花 落つ）」とある。また、梁・蕭子範「羅敷行」には「春風若有顧、惟願落花遲（春風 若し顧みる有れば、惟だ願ふ 落花の遅きを）」と見える。

5 城高短簫發 6 林空画角悲

「城高」辺境の砦が高い所にある。「古詩十九首」其十二に「東城高且長、逶迤自相属（東城 高く且つ長く、逶迤として自ら相ひ属す）」とあるのは、李善注に「城高且長、故登之以望也。（城 高く且つ長し、故に之れに登りて以て望むなり。）」とあるように城壁が高いことだが、砦が險阻な地にあることをいう。

「短簫」笛の名。軍楽に用いる。『晋書』樂志上に「其有短簫之樂者、則所謂『王師大捷、令軍中凱歌』者也。（其の短簫の樂なる者有るは、則ち所謂『王師 大捷すれば、軍中をして凱歌せしむる』者なり。）」とある。

また、宋・何承天「鼓吹鏡歌十五首」朱路篇に「清鞞驚短簫、朗鼓節鳴笳（清鞞 短簫を驚かせ、朗鼓 鳴

十九）其九には「攀条折其榮、將以遺所思（条に攀がけて其の榮を折り、將に以て思ふ所に遺らんとす）」と会うことのできない恋人に花をプレゼントしたいと詠う。

「上春」孟春に同じ。旧暦の正月。『周礼』春官・天府に「上春、鬯宝鎮及宝器。（上春、宝鎮 及び宝器に鬯ぬる。）」とあり、鄭玄注に「上春、孟春也。」とある。また齊・江孝嗣「離夜」詩に「離歌上春日、芳思徒以空（離歌 上春の日、芳思 徒に以て空し）」と見える。

3 葉密鳥飛礙 4 風輕花落遲

「葉密」葉がみっしりと茂る。晋・陸機「招隱」詩（『文選』）巻二十二）に「輕条象雲構、密葉成翠幄（輕条 雲構に象り、密葉 翠幄を成す）」と「密葉」の語が見え、梁・沈約「聽蟬鳴應詔」詩に「葉密形易揚、風迴響難住（葉 密にして 形 揚がり易く、風 迴りて 響き 住まり難し）」と「葉密」が見える。

「鳥飛礙」鳥が飛ぶのを妨げられる。齊・謝朓「詠竹」詩に「青虬飛不礙、黃口得相窺（青虬 飛びて礙げられず、黃口 相ひ窺ふを得たり）」とある。「青虬」は鳥の名。イカル、マメマワシ。

「風輕」風が微かで穏やか。宋・鮑照「与謝尚書莊三連句」に「風輕桃欲開、露重蘭未勝（風 輕くして 桃 開かんと欲し、露 重くして 蘭 未だ勝はず）」

と見える。「林空」林に人の気配がない。「林空」、六朝詩には他の用例は見当たらないが、「空林」は張協「雜詩」十首（『文選』）巻二十九）其六に「咆虎響窮山、鳴鶴聒空林（咆虎 窮山に響き、鳴鶴 空林に聒し）」と見える。「画角」竹、革製の笛。絵で裝飾される。やはり軍楽に用い、音色は悲しいとされた。梁詩以前の用例は見当たらない。宋・鮑照「擬行路難」十八首其十四に「朔風蕭条白雲飛、胡笳哀急辺氣寒（朔風 蕭条として 白雲 飛び、胡笳 哀急として 辺氣 寒し）」と。

7 曲中無別意 8 併是為相思

「曲中」短簫や画角が奏でる音楽には。梁・沈約「詠箎」詩（『玉台』）巻五）に「曲中有深意、丹誠君詎知（曲中 深意有り、丹誠 君 詎ぞ知らんや）」と。「無別意」その他の意味合いはない。「別意」、梁詩以前には用例は見当たらない。梁・沈滿願「彩毫怨」に「書中無別意、帷帳久離居（書中 別意無く、帷帳 久しく離居す）」と見える。

「併是」例外なく、いずれもである。少し遅れるが北周・庾信「春賦」に「河陽一県併是花、金谷從來滿園樹。（河陽 一県 併びに是れ花、金谷 從來 満園の樹。）」と。

「為相思」離ればなれになった男女が互いを慕い合うことを歌うための曲なのだ。宋・無名氏「説曲歌」八十

九首其八十六に「明月不応停、特為相思苦（明月 応に停むべからず、特だ相思の為に苦しむのみ）」と。

梁・劉邈「折楊柳」

【本文及び書き下し】

- 1 高樓十載別 高樓 十載 別れ
- 2 楊柳濯系枝 楊柳 系枝を濯ふ
- 3 摘葉驚開馱 葉を摘みては開くことの馱きに驚き
- 4 攀条恨久離 条を攀ちては久しく離るるを恨む
- 5 年年阻音息 年年 音息阻まれ
- 6 月月減容儀 月月 容儀減ず
- 7 春来誰不望 春 来れば 誰か望まざらん
- 8 相思君自知 相心思ふこと 君 自ら知らん

【日本語訳】

- 1 十年前にお別れしてから今もこの高殿におります
- 2 ヤナギの糸のような枝が洗うように水面に垂れています
- 3 葉を摘み取っては葉の広がるのが速いのにはドキッとし
- 4 枝に手をかけて引き寄せてはずっとお別れしたままなのが心残りではありません
- 5 来る年も来る年もあなたからの便りは届きませんし
- 6 月ごととわたしの容貌は衰えていきます
- 7 それでも春になればあなたがいるはずの方角を眺めずにはいられません

8 わたしがずっとあなたのことを思い続けていることはあなたにもきつとお分かりのはず

【校勘】

- 『芸文類聚』卷八十九・『古詩紀』卷九十八・『玉台新詠』卷八
- 0 「折楊柳」、『類聚』作「折楊柳詩」、『玉台』作「鼓吹曲折楊柳」。
- 3 「馱」、『類聚』『詩紀』『玉台』並作「馱」。
- 2 「濯」、『詩紀』作「濯」。
- 5 「息」、『玉台』作「信」、『詩紀』注云「一作『信』」。

【押韻】

「枝」「離」「儀」「知」、上平五支韻。

【作者】

生没年未詳。現存する詩は『玉台新詠』に収める四首のみ。『古詩紀』は『梁書』侯景伝に見える記事をもとめ「彭城人、曾為侯景所得。景攻台城不克、邈勸景乞和全師、景然之。（彭城の人、曾て侯景の所得る所と為る。景 台城を攻めて克たず、邈 景に和を乞ひて師を全うせんことを勧め、景 之れを然りとす。）」という。

【語釈】

- 1 高樓十載別
- 2 楊柳濯系枝

「高樓」たかどの。遠く旅に出た恋人を思う女性の住居として描かれる。「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其五に「西北有高樓、上与浮雲齊（西北に高樓有り、上は浮雲と齊し）」とあり、三国魏・曹植「七哀詩」（『文選』卷二十三。『玉台』卷二作「雜詩」）に「明月照高樓、流光正徘徊（明月 高樓を照らし、流光 正に徘徊す）」と。

「十載別」十年の間、別れ別れのままになっている。晋・張華「情詩」五首（『玉台』卷二）其一に「初為三載別、於今久滯淫（初め三載の別を為す、今に於いて久しく滯淫す）」と見える。

「濯系枝」糸のように伸びた枝が水面に垂れて洗っているように見える。或いはヤナギの枝が雨に濡れる様を描くかもしれない。宋・鮑照「喜雨」詩に「珍木抽翠条、炎卉濯朱芳（珍木 翠条を抽き、炎卉 朱芳を濯ふ）」（「濯」、『類聚』卷二作「濯」、『詩紀』卷六十二作「濯」。）とある。「糸枝」、六朝詩では他の用例は見当たらない。

3 摘葉驚開馱 4 攀条恨久離

「摘葉」葉を手でつまみとる。謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」詩（『文選』卷二十一）に「企石挹飛泉、攀林摘葉卷（石に企ちて飛泉を挹み、林を攀ちて葉卷を摘む）」と。

「開馱」出たばかりの葉は巻いて縮こまっているのに対

し、「開」は葉が成長して広がること。やや後の例だが陳・陰鏗「雪裏梅花」詩に「葉開隨足影、花多助重条（葉 開きて 足影に随ひ、花 多くして 重条に助けらる）」と見える。「馱」は速やかなこと。「攀条」枝に手をかける。右の梁簡文帝「折楊柳」でも引いた「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其九に「攀条折其榮、將以遺所思（条に攀がけて其の榮を折り、將に以て思ふ所に遺らんとす）」と。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首・平原侯植」（『文選』卷三十）にも「傾柯引弱枝、攀条摘蕙草（柯を傾けて弱枝を引き、条を攀ちて蕙草を摘む）」とある。「攀枝」の語も三国魏・曹植「種葛篇」（『玉台』卷二）に「攀枝長歎息、淚下沾羅襟（枝を攀ちて長歎息し、涙 下りて 羅襟を沾す）」と見える。

「恨久離」ずっと別れ別れになっていることが不満でならない。「古詩十九首」其十七に「上言長相思、下言久離別（上には言ふ 長に相ひ思ふと、下には言ふ 久しく離別すと）」と。

5 年年阻音息 6 月月減容儀

「年年」来る年も来る年も。宋・鮑令暉「古意贈今人」詩（『玉台』卷四。『類聚』卷四十二作吳邁遠「秋風曲」、『樂府詩集』卷六十作吳邁遠「秋風」、皆録前八句。）に「月月望君歸、年年不解綰（月月 君の歸るを望むも、年年 綰を解かず）」と。

「阻音息」便りが邪魔されて届かない。「音息」は陸機「為顧彦先贈婦」二首（『文選』卷二十四）其二に「形影參商乖、音息曠不達（形影 參商のごと乖き、音息 曠しく達せず）」とあり、李善注に「音息、音問・消息也。」と。

「減容儀」容貌が衰える。「容儀」は顔かたちや立ち居振る舞い。晋・陸機「日出東南隅行」（『文選』卷二十八云「或曰羅敷艶歌」）。「玉台」卷三作「艶歌行」。に「窈窕多容儀、婉媚巧笑言（窈窕として容儀多く、婉媚にして 笑言巧みなり）」とあり、梁・沈約「三月三日率爾成章」詩（『文選』卷三十）には「愛而不可見、宿昔減容儀（愛しめども見るべからず、宿昔 容儀を減ぜり）」とある。

7 春来誰不望 8 相思君自知

「春来」春が巡り来る。宋・顔延之「秋胡」詩（『文選』卷二十一）。「玉台」卷四。『樂府詩集』卷三十六作「秋胡行」に「春来無時豫、秋至恒早寒（春 来たるも時豫無く、秋 至れば 恒に早く寒かりき）」（「恒」「玉台」作「応」）とある。

「誰不望」思う人がいる方を遠く眺めない者はいない。顔延之「秋胡」詩に「傾城誰不顧、弭節停中阿（傾城 誰か顧みざらん、節を弭へて中阿に停まる）」と。

「相思」恋人のことを思い続ける。齊・謝朓「詠風」詩に「高響飄歌吹、相思子未知（高響 歌吹を飄はせ、

5 その昔、武昌では植え替えられたばかりの柳が見破られ

6 官渡には今でも生き延びた柳があることでしょう

7 そして胡笳が奏でる「出塞曲」の響きを

8 以前のままだに共有しているはずです

【校勘】

○『古詩紀』卷百八

8 「仍共」、『詩紀』注云「玉台』作『仍作』」。遼欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』注云、「不知何処」。

【押韻】

「情」「声」、下平十四清韻。「驚」「生」「鳴」、下平十二庚韻。庚・清同用。

【作者】

五五三〇六〇四。字は元秀、吳興長城（浙江省湖州市）の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四（五八二）年、即位。禎明三（五八九）年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。

亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が楽府である。

相ひ思ふこと 子 未だ知らず」と。

「君自知」あなたは勿論ご存じでしょう。清・紀容舒『玉台新詠考異』は「君字於義難通。疑為各字之悞。（君字 義に於いて通じ難し。疑ふらくは各字の悞り為らん。）」とするが、「相思」を互いに思い合うの意に解したためだろう。

陳・後主「折楊柳」二首其一

【本文及び書き下し】

- 1 楊柳動春情 楊柳 春情を動かし
- 2 倡園妾屢驚 倡園 妾 屢しば驚く
- 3 入楼含粉色 楼に入りて 粉色を含み
- 4 依風雜管声 風に依りて 管声を雜ふ
- 5 武昌識新種 武昌に新たに種ゑられしを識り
- 6 官渡有残生 官渡に残生有り
- 7 還將出塞曲 還た出塞の曲と
- 8 仍共胡笳鳴 仍ほ胡笳の鳴を共にす

【日本語訳】

- 1 柳が春の美しい情景の先駆けとなつて
- 2 妓女であるわたしは庭で何度も驚かされます
- 3 それは柳絮が白粉の色を帯びて高殿に入つて来るからです
- 4 風にそよぐ柳の音が笛の音といっしょに聞こえて来るからなのです

久保卓也氏「陳後主の文学に対する評価 ―唐・朱敬則「陳後主論」、呂温「人文化成論」から「漢魏六朝一百三家集」、『采菽堂古詩選』まで―」（『福山大学人間文化学部紀要』第四卷 二〇〇四）に詳しい。

【語釈】

1 楊柳動春情 2 倡園妾屢驚

【動春情】春の美しい情景が姿を見せる。「動」は発動、何か物事が始まるきっかけを与える。晋・無名氏「子夜四時歌」春歌二十首其一に「春風動春心、流目矚山林（春風 春心を動かし、流目して 山林を矚る）」と。「春情」は春の眺め。梁・蕭子範「春望古意」詩に「春情寄柳色、鳥語出梅中（春情 柳色に寄せ、鳥語 梅中より出づ）」と。また、男女の恋愛感情をいうこともある。齊・王融「詠琵琶」詩（『玉台』卷四）に「系中伝意緒、花裏寄春情（系中に伝意緒を伝へ、花裏に春情を寄す）」とある。

【倡園】妓女のいる庭園。六朝詩では同じく陳・江総「折楊柳」に「不悟倡園花、遙同羌嶺雪（悟らず 倡園の花の、遙かに羌嶺の雪と同じきを）」とある以外には見当たらない。

【妾】女性の謙称。

【屢驚】何度もハッとさせられる。陳後主「紫騮馬」二首其一にも「蓋転時移影、香動屢驚衣（蓋 転じて 時に影を移し、香 動きて 屢しば衣を驚かす）」と

あるが、こちらはサツとひるがえること。

3 入楼含粉色 4 依風雜管声

「入楼」妓女の住まう高殿に入り込んで来る。梁・元帝蕭繹「詠細雨」詩に「入楼如霧上、私馬似塵飛（楼に入るは霧の上るが如く、馬を払ふは塵の飛ぶに似る）」と。ここは柳絮が風に吹かれて舞い込む。

「含粉色」おしろいのような白さを帯びている。梁・元帝蕭繹「赴荊州泊三江口」詩に「水際含天色、虹光入浪浮（水際 天色を含み、虹光 浪に入りて浮かぶ）」とあり、同じく「和林下作妓応令」詩に「輕花乱粉色、風篠雜絃声（輕花 粉色を乱し、風篠 絃声を雜ふ）」と。

「依風」風が吹く方向に身を寄せる。「古詩十九首」其一に「胡馬依北風、越鳥巢南枝（胡馬 北風に依り、越鳥 南枝に巢くふ）」と。ここは柳の枝が風に吹かれる様を描き、そこから聞こえる音をいう。

「雜管声」笛の音が入り混じる。「管声」は簫や笙など管樂器の音。梁・何遜「日夕望江贈魚司馬」詩（『玉台』卷五）に「管声已流悅、絃声復悽切（管声 已に流悅し、絃声 復た悽切たり）」とある。また、右に引いた梁・元帝蕭繹「和林下作妓応令」詩を参照。

5 武昌讖新種 6 官渡有殘生

「武昌讖新種」武昌（湖北省武漢市）では盗んで植えた

「還將」その上と。「將」は「与」の意。梁・王僧孺「春怨」詩（『玉台』卷六、『古詩紀』卷九十一作「吳均」）に「独与響相酬、還將影自逐（独り響きと相ひ酬い、還た影と自ら逐ふ）」とある。

「出塞曲」樂府「横吹曲」のひとつ。『樂府詩集』卷二十一の郭茂倩の題解に、曹嘉之『晋書』曰、「劉疇嘗避乱塙壁、賈胡百数欲害之、疇無懼色、援笳而吹之、為『出塞』『入塞』之声、以動其遊客之思、於是群胡皆垂泣而去。」

（曹嘉之『晋書』に曰く、「劉疇 嘗て乱を塙壁に避ける色無く、笳を援りて之れを吹き、『出塞』『入塞』の声を為して、以て其の遊客の思ひを動かせば、是に於いて群胡 皆な泣を垂れて去る」と。）とあり、非常にもの悲しい曲とされていたことが分かる。

「胡笳」あしぶえ。中国西北遊牧民族の管樂器。哀切な音色で知られる。後漢・蔡琰「悲憤」詩に「胡笳動兮 辺馬鳴、孤雁帰兮 声嚶嚶（胡笳 動きて 辺馬 鳴き、孤雁 帰りて 声 嚶嚶たり）」と。

陳・後主「折楊柳」二首其二

【本文及び書き下し】

- 1 長条黄復緑 長条 黄にして復た緑に
- 2 垂糸密且繁 垂糸 密にして且つ繁し

ばかりだと見破られた。『晋書』陶侃伝に「陶侃」嘗課諸營種柳、都尉夏施盜官柳植之於己門。侃後見、駐車問曰、『此是武昌西門前柳、何因盜來此種』。施惶怖謝罪。（嘗て諸營に柳を種ふんことを課し、都尉夏施官柳を盗みて之れを己の門に植う。侃 後に見て、車を駐め問ひて曰く、『此れは是れ武昌西門前の柳ならん、何に因りてか盗み来たりて此に種う』と。施 惶怖して罪を謝す。）と見える故事に拠る。北周・庾信「楊柳歌」に「武昌城下誰見移、官渡營前那可似（武昌城下 誰にか移され、官渡營前 那ぞ知るべけん）」と同じ故事を用いた例がある。

「官渡有殘生」官渡（河南省中牟県の東北）ではまだ生き延びている。三国魏文帝曹丕「柳賦」序に「昔建安五年、上与袁紹戰于官渡。是時余始植斯柳。自彼迄今、十有五載矣。左右僕御已多亡、感物傷懷。（昔 建安五年（二〇〇）年、上 袁紹と官渡に戦ふ。是の時 余 始めて斯の柳を植う。彼れより今に迄ぶまで、十有五載。左右僕御 已に多く亡ぜり、物に感じて傷み懷ふ。）と見える故事に拠る。「殘生」は余生、残りの歲月。六朝詩ではあまり用いられない語のようである。庾信「擬連珠」四十四首其二十七に「如彼梧桐、雖殘生而猶死。（彼の梧桐の如く、殘生と雖も而も猶ほ死せるがごとし。）」と。

7 還將出塞曲 8 仍共胡笳鳴

- 3 花落幽人逕 花は落つ 幽人の逕に
- 4 歩隱將軍屯 歩は隱る 將軍の屯に
- 5 谷暗宵鉦響 谷 暗くして 宵鉦 響き
- 6 風高夜笛喧 風 高くして 夜笛 喧し
- 7 聊持暫攀折 聊か持して 暫く攀折すれば
- 8 空足憶中園 空しく中園を憶ふに足る

【日本語訳】

- 1 柳の枝が長く伸びて黄色にまた緑に
- 2 垂れた糸のようにびっしりと繁っている
- 3 柳絮は陶淵明のような隱者の住居に散ったこともあったらうし
- 4 周亜夫の駐屯地では柳に歩兵の姿が隠れたこともあったらう
- 5 今は夕闇に沈む谷間に軍營のかねの音が響き
- 6 風が高く吹き抜けて笛の音が耳に騒がしいほど
- 7 取り敢えずは柳の枝に手をかけて握っただけ
- 8 無駄ではあるけれども故郷の庭園を思い出すことではできるだろう

【押韻】

「繁」「喧」「園」、上平二十二元韻。「屯」、上平二十三魂韻。元・魂同用。

【語釈】

1 長条黄復緑 2 垂糸密且簾

〔長条〕長く伸びた枝。漢・無名氏「古詩」〔『玉台』巻一〕に「青袍似春草、長条随風舒（青袍 春草に似、長条 風に随ひて舒ぶ）」と。多くの場合、柳についていう。梁・元帝蕭繹「緑柳」詩に「長条垂払地、輕花上逐風（長条 垂れて地を払ひ、輕花 上りて風を逐ふ）」

〔黄復緑〕黄色だったり緑だったり。春の新緑を描写する。齊・王融「詠女蘿」詩に「含煙黄且緑、因風卷復垂（煙を含みて 黄 且つ緑に、風に因りて 巻きて復た垂る）」と。

〔垂糸〕長く伸びた枝を垂らす。梁・簡文帝蕭綱「和湘東王名士悦傾城」詩（『玉台』巻七）の「垂糸繞帷幔、落日度房櫳（垂糸 帷幔を繞り、落日 房櫳を度る）」のようにクモの糸をいう場合もある。少し後の例になるが、隋・盧思道「贈劉儀同西聘」詩に「垂糸被柳陌、落錦覆桃蹊（垂糸 柳陌を被ひ、落錦 桃蹊を覆ふ）」とあるのはヤナギの枝についていうだろう。

3 花落幽人逕 4 步隠將軍屯

〔花落〕柳絮が風に舞い落ちる。右の梁・簡文帝蕭綱「折楊柳」に「葉密鳥飛礙、風輕花落遲（葉 密にして 鳥 飛びて礙げられ、風 軽くして 花 落つること遅し）」とあった。

〔幽人逕〕隠者の住居。「幽人」は世俗を避けて心静かに

〔谷暗〕谷間に夕闇が迫る。北周・庾信「行途賦得四更応詔」詩に「深谷暗蔵人、欽松横礙馬（深谷 暗くして 人を蔵し、欽松 横たはりて 馬を礙ぐ）」と。陳・岑之敬「折楊柳」にも「塞門交度葉、谷口暗横枝（塞門 交はりて葉度り、谷口 暗くして枝横たふ）」と。

〔宵鉦〕夜になって聞こえて来るかねの音。六朝詩では他の用例は見当たらない。「鉦」は軍中で用いる金属製の打楽器。

〔風高〕風が高いところを吹き抜ける。秋のイメージを伴う。陳・張正見「賦得秋蟬鳴柳応衡陽王教」詩に「風高知響急、樹近覺声連（風 高くして 響きの急なるを知り、樹 近くして 声の連なるを覚ゆ）」とある。

〔高風〕の語はもう少し早く晋・傅玄「秦女休行」に「今我作歌詠高風、激揚壯發悲且清（今 我 歌を作りて 高風を詠じ、激揚壯発して 悲しくして且つ清し）」などと現れる。

〔夜笛〕夜になって聞こえて来る笛の音。これも六朝詩では他の用例は見当たらない。

7 聊持暫攀折 8 空足憶中園

〔聊持〕取り敢えずの間は手に持っておく。陳・陰鏗「賦詠得神仙」詩に「聊持履成燕、戯以石為羊（聊か履を持ちて燕と成し、戯れに石を以て羊と為す）」と。

〔憶中園〕故郷の庭園を思い出す。齊・謝朓「直中書省」

暮らす日と。晋・陶淵明「命子」詩十章其二に「鳳隱于林、幽人在丘（鳳 林に隠れ、幽人 丘に在り）」とある。「逕」は小道、転じて隠者の庭や屋敷、「徑」の別体。陶淵明「婦去来」（『文選』巻四十五。本集作「婦去来兮辞」）に「三逕就荒、松菊猶存。（三逕 荒に就けども、松菊 猶ほ存せり）」とあり、李善注は後漢・趙岐『三輔決録』を引いて「蔣詡、字元卿、舍中三逕、唯羊仲・求仲從之遊。皆控廉逃名不出。（蔣詡、字は元卿、舍中 三逕のみ、唯だ羊仲・求仲のみこれに従ひて遊ぶ。皆な廉を控き名を逃れて出でず。）」という。また、陶淵明「五柳先生伝」に「先生不知何許人也。亦不詳其姓字。宅辺有五柳樹、因以為号焉。（先生 何許の人なるかを知らず。亦た其の姓字を詳らかにせず。宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す。）」と。

〔歩隠〕歩兵の姿がヤナギの蔭に隠れる。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔將軍屯〕漢の文帝の時、將軍周亜夫が兵を駐屯させた細柳（陝西省咸陽市）の地。『史記』絳侯周勃世家に「文帝之後六年、匈奴大入辺。……以河内守亜夫為將軍、軍細柳、以備胡。（文帝の後六年、匈奴 大いに辺に入る。……河内の守亜夫を以て將軍と為し、細柳に軍せしめ、以て胡に備ふ。）」と見える故事に拠る。

5 谷暗宵鉦響 6 風高夜笛喧

詩（『文選』巻三十）に「信美非吾室、中園思偃仰（信に美なるも吾が室に非ず、中園に偃仰せんことを思ふ）」と。また、陰鏗「和侯司空登樓望郷」詩に「瞻雲望鳥道、対柳憶家園（雲を瞻ては鳥道を望み、柳に對しては家園を憶ふ）」とある。

陳・岑之敬「折楊柳」

- 【本文及び書き下し】
- 1 將軍始見知 將軍 始めて見知す
 - 2 細柳繞宮垂 細柳の宮を繞りて垂るるを
 - 3 懸糸払城轉 懸糸 城を払ひて転じ
 - 4 飛絮上宮吹 飛絮 上宮に吹く
 - 5 塞門交度葉 塞門 交ごも葉度り
 - 6 谷口暗横枝 谷口 暗かに枝横たふ
 - 7 曲城攀折処 曲城 攀折せし処
 - 8 唯言怨別離 唯だ言ふ 「別離を怨む」と

【日本語訳】

- 1 將軍はやつと気付いたのだろう
- 2 細柳の地が地名に相応しく枝の細い柳が兵營を囲むように枝を垂れているのに
- 3 垂れ下がった枝は風に吹かれて城壁をかすめるように靡き
- 4 ヤナギの綿毛は美しいあの人がいるところまで風に吹き上げられていった

- 5 辺塞では兵士が携えたヤナギの葉が次々に通り過ぎていき
6 谷間の入口ではそのヤナギの枝がひっそりと地面に落ちて
7 撃剣の盛んな地である曲城でヤナギの枝を手折った時には
8 「お別れが悲しいのです」と言っただけなのに、まさか死んでしまおうとは

【校勘】

- 『文苑英華』卷二百八・『古詩紀』卷百十六
0 「岑之敬」、底本及『英華』並作「岑敬之」、而底本注云「拋『陳書』卷三四・『詩紀』卷一〇六改」。今從之。
6 「横」、底本作「還」、『英華』『詩紀』皆作「横」、而底本注云「拋毛刻本注及『詩紀』改」。今從之。毛刻本即汲古閣本(『四部叢刊』影印本)也。
7 「城」、底本及『詩紀』並作「成」。按、『四庫全書』本・『四部叢刊』影印本皆作「城」、今從而改。

【押韻】

「知」「垂」「吹」「枝」「離」、上平五支韻。

【作者】

(五一九〜五七九)。字は思礼、南陽棘陽(河南省南陽市)の人。梁武帝の中大通六(五三四)年、武帝に拔擢

かに河を過らんことを議す。」とあり、李賢注が引く袁宏『後漢紀』に「惟・汜繞宮叫呼、吏士失色、各有分散意。(「李」惟・「郭」汜、宮を繞りて叫呼し、吏士色を失ひ、各おの分散せんとの意有り。)」と見える。

3 懸糸払城転 4 飛絮上宮吹

「懸糸」垂れ下がった枝。語は晋・無名氏「七日夜女郎歌」九首其五に「桑蚕不作繭、昼夜長懸糸」と見えるが、これは蚕の糸。

「払城」柳の枝が宮殿をかすめる。梁・沈約「翫庭柳」詩(『玉台』卷五作「詠柳」)に「輕陰払建章、夾道連未央(輕陰 建章を払ひ、道を夾みて未央に連なる)」と。

「転」風に揺れる。梁簡文帝蕭綱「戲作謝惠連体十三韻」詩(『玉台』卷七)に「桃花紅若点、柳葉乱如糸。糸条転暮光、影落暮陰長(桃花 紅 若点ずるが如く、柳葉 乱ること 糸の如し。糸条 暮光に転じ、影落ちて 暮陰 長し)」とある。

「飛絮」風に吹かれる柳の綿毛。六朝詩には他の用例は見当たらないが、陳・徐陵「長相思」二首其二に「柳絮飛還聚、遊糸断復結(柳絮 飛びて還た聚まり、遊糸 断ちて復た結ぶ)」と。

「上宮」衛の地名。美しい女性が居る場所として用いられる。語は『詩経』鄘風・桑中に「期我乎桑中、要我

され、以後晋安王の中記室などを勤めた。陳宣帝の太建(五六九〜五八二)の初め、東宮義省学士を授けられ、南台詔書侍御などを歴任した。今に残る詩は四首、いずれも『樂府詩集』に収められる。

【語釈】

1 將軍始見知 2 細柳繞營營

「將軍」漢の將軍だった周亜夫をいう。右の陳・後主「折楊柳」二首其二「將軍屯」語釈参照。

「見知」知る。分かる。王雲路『六朝詩歌語詞研究』(黒龍江教育出版社 一九九九)に「見知 謂知曉。」とあり、梁・丘遲「題琴朴奉柳吳興」詩に「凡耳非所別、君子特見知(凡耳は別つ所に非ず、君子のみ 特だ見知す)」とあるのを引く。また、「見」が受動を表す助動詞となり、分かってもらおう、理解されるの意になる場合もある。梁・柳惲「度閨山」(『玉台』卷五)に「惟持德自美、本以容見知(惟だ徳を持して自ら美とし、本容を以て知らる)」と。

「細柳」本来は周亜夫が駐屯した地名だが、ここは枝の細い柳の意で用いる。三国魏・劉楨「贈徐幹」詩(『文選』卷二十三)に「細柳夾道生、方塘含清源(細柳道を夾みて生じ、方塘 清源を含む)」とあるのはその例。

「繞營」軍營の周囲を取り囲む。『後漢書』董卓伝に「承奉等夜乃潜議過河。(董)承・(楊)奉等 夜 乃ち潜

乎上宮(我を桑中に期し、我を上宮に要す)」とあるのに拠る。「毛伝」に「桑中・上宮、所期之地。(桑中・上宮、期する所の地なり。)」とある。鮑照「采桑」(『玉台』卷四)に「采桑淇洧間、還戲上宮閣(桑を采る 淇洧の間、還た戯る 上宮の閣)」と。

5 塞門交度葉 6 谷口暗橫枝

「塞門」辺境の砦。宋・顔延之「赭白馬賦」(『文選』卷十四)に「簡偉塞門、猷狀絳闕。(偉を塞門に簡び、状を絳闕に猷ず。)」とあり、李善注に「塞、紫塞也。……有関故曰門。(塞、紫塞なり。……関有り故に門と曰ふ。)」と。

「交度葉」出征兵士が故郷を思い出すすがに携えた柳の葉が代わるがわる辺境の関所を通過していく。「度葉」、梁・何遜「和蕭諮議岑離閣怨」詩(『玉台』卷五作「閨怨」)に「窗中度落葉、簾外隔飛螢(窗中 落葉度り、簾外 飛螢を隔つ)」と。

「谷口」谷間の出入口。『六韜』分陰に「衢道・谷口、以武衝絶之。(衢道・谷口、武衝を以て之れを絶つ。)」とあり、戦闘の際の要地。

「暗橫枝」兵士たちが持っていた柳の枝が地面に落ちる。兵士の戦死を暗示するだろう。何遜「詠早梅」詩に「枝横却月觀、花繞凌風台(枝は横たふ 却月觀、花は繞る 凌風台)」と。

7 曲城攀折処 8 唯言怨別離

〔曲城〕山東省招遠市。「曲成」とも。前漢の將軍虫達が封ぜられた地。『漢書』高惠功臣表に「曲成圍侯虫達、…、初從起碣、至霸上。…、定三秦、破項羽陳下、…、擊燕代拔之。(曲成圍侯虫達、…、初め從ひて碣に起り、…、霸上に至る。…、三秦を定め、項羽を陳下に破り、…、燕代を撃ちて之れを抜く。)」と見え、後漢・王充『論衡』別通に「劍伎之家、鬪戰必勝者、得曲城・越女之学也。(劍伎之家、鬪戰して必ず勝つ者、曲城・越女の学を得たるなり。)」とある。転じて擊劍の名手を指すようになり、擊劍の盛んな地を表すようになった。魏・阮籍「詠懷詩」其六十一に「少年学擊刺、妙伎過曲城(少年 擊刺を学び、妙伎 曲城を過ぎる)」と。ここは「谷口」の戦場で戦死した兵士の出身地として解した。

〔唯言〕くと言っただけなのに。ただ一言だけ言いたいのは。梁・劉孝威「詠佳麗」詩(『玉台』卷十)に「唯言有一恨、恨不逐人心(唯だ言ふ 一恨有り、恨むらくは人心を逐はずと)」と。

陳・徐陵「折楊柳」

〔本文及び書き下し〕

- 1 嫋嫋河堤樹 嫋嫋たり 河堤の樹
- 2 依依魏主宮 依依たり 魏主の宮
- 3 江陵有旧曲 江陵に旧曲有り

〔押韻〕
〔宮〕「声」「城」「情」、下平十四清韻。

〔作者〕五〇七く五八三。梁、陳に仕えた文人。字は孝穆、東海郡郟(山東省)の人。父の徐摛は庾信の父庾肩吾とともに梁の太子蕭綱(後、簡文帝)の文学サロンを代表する文人であり、「宮体詩」の形成に大きな影響を与えた。徐陵も蕭綱に優遇され、その命を受けて『玉台新詠』を編集した。北朝に使用している間に梁が滅びたが、苦難の末に南歸し、陳に仕え吏部尚書など高官を歴任して政治的にも重きを成した。また文壇の領袖として庾信と名を齊しくし「徐庾体」と称された。『玉台新詠』序など文章でも優れた作品を残している。

〔語釈〕

0 折楊柳

〔折楊柳〕許逸民校箋『徐陵集校箋』(中華書局 二〇〇八)はこの詩の【題解】に、

『玉台新詠』卷七録「皇太子聖製詩四十三首」、其中有「和湘東王橫吹曲三首」、其一為「折楊柳」。

「皇太子」謂蕭綱、徐陵嘗為蕭綱東宮鈔撰學士、此篇可能是當日奉和之作。『玉台新詠』卷七に「皇太子聖製詩四十三首」を採録し、その内に「和湘東王橫吹曲三首」があり、其の「折楊柳」である。

「皇太子」とは蕭綱のことであり、徐陵は蕭綱の東

- 4 洛下作新声 洛下に新声作こる
- 5 妾对長楊苑 妾は対す 長楊苑
- 6 君登高柳城 君は登る 高柳城
- 7 春還応共見 春 還れば 応に共に見るべきも
- 8 蕩子太無情 蕩子は太だ無情

【日本語訳】

- 1 布陣した河のほとりの柳に柔らかな風が吹き
- 2 魏王の軍営では柳のしなやかな枝が揺れていたことでしょう
- 3 江陵の蕭綱様が新しく「折楊柳」をお作りになり
- 4 都では蕭綱様が新しく「折楊柳」をお作りになったとか
- 5 わたくしめは都の宮殿を眼の前にしておりますが
- 6 あなたは高柳の城壁に登っておられますか
- 7 春がやって来ましたなら、一緒に春の風景を眺めているはずなのに
- 8 故郷をお忘れになったのか、旅のあなた様はあまりに情がなさすぎです

【校勘】

- 『文苑英華』卷二百八・『古詩紀』卷百十
- 1 「樹」、『四庫全書』本『樂府詩集』作「草」、『詩紀』注云「一作『柳』」。

宮鈔撰學士だったことがあるので、この詩は恐らくその頃の奉和の作だろう。)との案語を附す。奉和の作であるかどうかは定かでないが、徐陵が簡文帝蕭綱と、湘東王、後の元帝蕭繹それぞれ「折楊柳」を意識していた可能性は高いのではないかと思われる。

1 嫋嫋河堤樹 2 依依魏主宮

〔嫋嫋〕風がゆったりと吹くさま。また木が風に揺れるさま。『楚辭』九歌・湘夫人に「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下(嫋嫋たる秋風、洞庭 波たちて 木葉 下る)」とあり、王逸注に「嫋嫋、秋風揺木貌。(嫋嫋、秋風の木を揺らす貌。)」とある。また、宋・鮑照「在江陵嘆年傷老」詩に「翩翩燕弄風、嫋嫋柳垂道(翩翩として 燕 風を弄び、嫋嫋として 柳 道に垂る)」と。

〔河堤〕河川の堤防。三国魏・王粲「從軍詩」(『文選』卷二十七)其四に「逍遙河堤上、左右望我軍(河堤の上)に逍遙し、左右に我が軍を望む」とあり、李善注は「詩經・鄭風・清人に「二矛重喬、河上平逍遙(二矛 重喬、河上に逍遙す)」とあるのを引く。

〔依依〕枝のしなやかな様。『詩經』小雅・采薇に「昔我往矣、楊柳依依(昔 我 往く、楊柳 依依たり)」
〔魏主〕魏王。三国魏文帝曹丕「柳賦」序に「昔建安五年、上与袁紹戰于官渡。是時余始植斯柳。自彼迄今、十有五載矣。左右僕御已多亡、感物傷懷。(昔 建安五

〔二〇〇〕年、上 袁紹と官渡に戦ふ。是の時 余 始めて斯の柳を植う。彼れより今に迄およぶまで、十有五載。左右僕御 已に多く亡ぜり、物に感じて傷み懐なほふ。〕とあるのに拠り、ここは曹丕をいう。

3 江陵有旧曲 4 洛下作新声

〔江陵〕湖北省荊州市。

〔旧曲〕古い方の楽曲。『徐陵集校箋』はこの句の【箋注】で『江陵』、代指蕭繹（五〇八―五五五）。梁簡文帝大宝三年（蕭繹猶稱太清六年、五五二）十一月、蕭繹於江陵（今湖北荊州）承制、改元承聖、是即梁元帝。承聖三年（五五五）十一月、西魏攻陷江陵、元帝遇害。

〔旧曲』、謂蕭繹有『折楊柳』之作。〔『江陵』は、蕭繹を指す。梁の簡文帝の大宝三年（蕭繹はなお太清六年を使っていた）十一月、蕭繹は江陵で承制（詔を承けて天子の事業を代行する）し、年号を承聖に改めたが、これが梁の元帝である。承聖三年十一月、西魏が江陵を攻めて陥落させ、元帝は殺害された。『旧曲』は、蕭繹に『折楊柳』の作があることを言う。）とする。概ね首肯できると考えるが、蕭繹は湘東王の頃には江陵に鎮して重きをなしていたので、「江陵」は湘東王だった蕭繹を指すのではないかと思う。梁元帝「折楊柳」訳注は前稿「六朝樂府訳注（二十一）」に掲載した。

〔洛下〕洛陽をいうが、ここは都建康を指す。梁・劉令嫺「祭夫徐悱文」に「調逸許中、声高洛下。（調は

許中に逸し、声は洛下に高し。）」と。

〔新声〕新しい方の楽曲。『徐陵集校箋』はこの句の【箋注】で『洛』、北洛水、即今陝西洛河。『洛下新声』、疑指庾信（五一―五八一）所作「楊柳歌」。庾信在梁時与徐陵同朝為官、聘於東魏、江陵陷、遂留長安。仕周、於建德六年（五七七）出為洛州刺史。洛州治上洛（今陝西商州）、在洛水之南、故称『洛下』。〔洛』は

北洛水、今の陝西省の洛河である。『洛下新声』は、恐らく庾信が作った『楊柳歌』を指すのだろう。庾信は梁にいた時に徐陵と同じ朝廷で官となり、東魏に招かれ、江陵が陥落すると、そのまま長安に留まった。周に仕え、建德六年に地方に出て洛州刺史となった。洛州の治は上洛（今の陝西省商洛市）で、洛水の南にあつたので、『洛下』と呼んだのである。）とするが、【題解】で「此篇可能是当日奉和之作」としておきながら、ここで庾信の「楊柳歌」に言及する理由が分からない。

また、「はじめに」で触れた佐藤大志氏「梁陳の『折楊柳』―『攀折』の『折楊柳』―」は「そこで、もう一つの解釈として考えられるのが、第三句は南の西曲由来の「折楊柳」を指し、第四句は北の梁鼓角横吹曲由来の「折楊柳」の二曲を指す」という説を提示する。ここは「玉台新詠」巻七に収める、皇太子簡文が湘東王の横吹曲「折楊柳」に和した「折楊柳」を指すと解した。

5 妾对長楊苑 6 君登高柳城

〔妾〕女性の謙称。「妾々、君々」は梁・吳均「閨怨」詩に「妾坐江之介、君戍小長安（妾は坐す 江の介、君は戍る 小長安）」、劉孝綽「班婕妤怨」に「妾身似秋扇、君恩絶履綦（妾の身は秋扇に似、君の恩は履綦絶つるがごとし）」とあるなど、閨怨詩にしばしば現れる。

〔長楊苑〕漢の離宮。『三輔黄圖』巻一「秦宮」に「長楊宮、在今整屋東南三十里、本秦旧宮、至漢修飾之以備行幸。宮中有垂楊数畝、因為宮名。（長楊宮、今の整屋東の東南三十里に在り、本と秦の旧宮、漢に至り之れを修飾して以て行幸に備ふ。宮中に垂楊数畝有り、因りて宮名と為す。）」とあり、楊が植えられていたことを伝えるが、ここは「楊」字を借りただけであり、「妾」が都に在ることを表す。簡文帝「遊人」詩（『玉台』巻十）に「遊戲長楊苑、携手雲台間（遊戲す 長楊の苑、手を携ふ 雲台の間）」と。

〔高柳城〕山西省大同市。『後漢書』光武帝紀下に「代郡太守劉興擊盧芳將賈覽於高柳、戰歿。（代郡太守劉興盧芳の將 賈覽を高柳に撃つも、戦歿す。）」と見え、李賢注に「高柳、県、属代郡、故城在今雲州定襄県に在り。」と。ここは「柳」字を借りるだけで、「君」が戦地に在ることを表す。梁・庾肩吾「奉和湘東王応令」詩二首（『玉台』巻八）・春宵に「願及帰飛雁、因書寄高柳（願はくは 帰飛の雁に及ばんことを、書に因り

て高柳に寄せる）」と。

7 春還応共見 8 蕩子太無情

〔春還〕春がやって来る。どこかに行っていた春がまた帰って来る。梁・元帝蕭繹「春日」詩に「春還春節美、春日春風過（春 還りて 春節 美にして、春日 春風 過ぐ）」と。

〔蕩子〕家に帰ることを忘れてしまった旅人。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其二に「昔為倡家女、今為蕩子婦。蕩子行不歸、空牀難獨守（昔 倡家の女為り、今 蕩子の婦と為る。蕩子 行きて帰らず、空牀 独り守り難し）」とあり、李善注は『列子』天瑞に「有人去郷土、離六親、廢家業、遊於四方而不歸者、何人哉。世必謂之為狂蕩之人矣。（人の郷土を去り、六親を離れ、家業を廢し、四方に遊びて帰らざる者有り、何人ぞや。世 必ず之れを謂ひて狂蕩の人と為さん。）」とあるのを引く。

〔太無情〕あまりにも情というものがなさすぎる。梁・劉令嫺（『樂府詩集』卷四十三作「王叔英妻沈氏」）「和婕妤怨」詩（『玉台』巻八）に「寵移終不恨、讒枉太無情（寵 移るも 終に恨みず、讒枉 太だ情無し）」と。「無情」は感情を持たないこと。簡文帝蕭綱「和蕭侍中子顯春別」詩（『玉台』巻九）四首其一に「無情無意猶如此、有心有恨徒別離（無情無意 猶ほ此くの如く、有心有恨 徒に別離す）」とある。

陳・張正見「折楊柳」

【本文及び書き下し】

- 1 楊柳半垂空 楊柳 半ば空に垂れ
- 2 裊裊上春中 裊裊たり 上春の中
- 3 枝疏董沢箭 枝は疎らなり 董沢の箭
- 4 葉碎楚臣弓 葉は碎かる 楚臣の弓
- 5 色映長河水 色は長河の水に映じ
- 6 花飛高樹風 花は高樹の風に飛ぶ
- 7 莫言限宮掖 言ふ莫かれ 宮掖に限らると
- 8 不閉長楊宮 閉ぢず 長楊宮

【日本語訳】

- 1 柳の枝が地面から半ばのところまで垂れ
- 2 そよ風にゆらゆら揺れる、初春の頃
- 3 かつては董沢の柳は矢柄にされて枝が疎らになり
- 4 楚の将だった養由基に射抜かれて葉が粉々にされたこともありました
- 5 今は平和な時を迎え、長々と流れる川の水面にその姿を映し
- 6 柳の綿毛が高い樹木に吹く風に舞っています
- 7 どうぞ宮中から出ることがかなわないのだなどと仰っています
- 8 離宮である長楊宮は閉じられていないのですから

1 楊柳半垂空 2 裊裊上春中

「半垂空」柳の枝が半分くらいの高さまで垂れている。
 梁・蕭子範「傷往賦」に「帷半垂而將下、尚仿像而疑真。(帷 半ば垂れて將に下らんとし、尚ほ仿像として真なるかと疑ふ。)」と。
 「裊裊」木が風に揺れるさま。「嫋嫋」また「裊裊」とも。鮑照「采菱歌」七首其四に「裊裊風出浦、容容日向山(裊裊として 風 浦を出で、容容として 日 山に向かふ。)(「裊裊」、「樂府詩集」卷五十一作「裊裊」。「容容」作「沈沈。)」とある。
 「上春」孟春に同じ。旧暦の正月。簡文帝の「折楊柳」にも「楊柳乱成糸、攀折上春時(楊柳 乱れて糸を成し、攀折す 上春の時)」とあった。

3 枝疏董沢箭 4 葉碎楚臣弓

「枝疏」多くの矢に作るのに用いたため、柳の枝がまばらになってしまった。
 「董沢箭」董沢に生えた柳で作った矢。董沢は沢の名。山西省運城市。『春秋左氏伝』宣公十二年に「厨武子御。下軍之士多從之。每射抽矢蔽、納諸厨子之房。厨子怒曰、『非子之求而、蒲之愛。董沢之蒲可勝既乎』(厨武子 御たり。下軍の士 多く之れに従ふ。射る毎に矢蔽を抽き、諸れを厨子の房に納る。厨子 怒りて曰く、『子を之れ求むるに非ずして、蒲を之れ愛む。董沢の蒲 可勝げて既くすべけんや』)」とあり、杜預注

【校勘】

○『古詩紀』卷百十二

【押韻】

「空」「中」「弓」「風」「宮」、上平一東韻。

【作者】生没年不詳。梁・陳に仕えた。字は見蹟、清河の東武城(山東省東武城の西北)の人。梁の簡文帝が東宮にあつた時、年十三にして頌を獻じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山(廬山のこと)に難を避けたが、陳の武帝が即位(五五七年)するに及び、詔によつて都建康に召還され、宣帝の太建(五六九〜五八二)中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。(其の五言詩 尤も善し、大いに世に行はる。)」と評するが、南宋・嚴羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省發。所謂『雖多亦奚以為』。(南北朝の人 惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省發するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん』)」と酷評する。道坂昭広氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」(興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店 二〇〇〇)という評が公平なところだと思ふ。

【語釈】

に「蒲、楊柳、可為為箭。(蒲、楊柳、以て箭と為すべし。)」と。また「董沢、沢名、河東聞喜界東北有董池陂。(董沢、沢の名、河東聞喜界の東北に董池陂有り。)」と。「矢」は木製、「箭」は竹製。
 「葉碎」柳の葉が粉々になる。
 「楚臣弓」春秋時代の楚の将だった養由基の弓。『史記』

周本紀に「楚有養由基者、善射者也。去柳葉百步而射之、百發而百中之。左右觀者數千人、皆曰善射。(楚に養由基なる者有り、射を善くする者なり。柳葉を去ること百歩にして之れを射、百たび發して百たび之れに中つ。左右の觀る者 數千人、皆な善く射ると曰ふ。)」と見える。

5 色映長河水 6 花飛高樹風

「色映」光景が水面などに映る。陳・岑之敬「對酒」に「色映臨池竹、香浮滿砌蘭(色は映る 池に臨むの竹、香は浮かぶ 砌に滿つるの蘭)」と。
 「長河」長い川。六朝詩では多く黄河または天の川を指す。三国魏・庾瑒「別詩」二首其二に「浩浩長河水、九折東北流(浩浩たり 長河の水、九折して 東北に流る)」と。
 「花飛」ここは柳の綿毛が風に舞う。語は齊・王融「臨高台」に「花飛低不入、鳥散遠時來(花 飛び 低くして入らず、鳥 散じ 遠くして時に來たるのみ)」と。

「高樹風」高い木に吹き付ける風。曹植「野田黃雀行」に「高樹多悲風、海水揚其波（高樹 悲風多く、海水其の波を揚ぐ）」とあり、梁・柳惲「從武帝登景陽樓」詩に「太液滄波起、長楊高樹秋（太液 滄波 起こり、長楊 高樹 秋なり）」と。

7 莫言限宮掖 8 不閉長楊宮。

「莫言」くなどと口にされますな。鮑照「擬行路難」十九首其十九に「莫言草木委冬雪、会応蘇息遇陽春（言ふ莫かれ 草木 冬雪に委ゆと、会はず応に蘇息して陽春に遇ふべし）」と。

「宮掖」宮中。「掖」は掖庭。宮中正殿わきの建物のこと。皇妃や宮女のいる所。六朝詩中の用例は多くないが、晋・張駿「雜露行」に「禍霧萌宮掖、胡馬動北垆（禍霧 宮掖に萌し、胡馬 北垆に動く）」と見える。

「不閉」閉鎖されていない。北魏・温子昇「從駕幸金墉城」詩に「長門久已閉、離宮一何靜（長門 久しく已に閉ぢ、離宮 一に何ぞ静かなる）」と。第7・8句の宮中に住まう人に語り掛けるという内容から推して、梁簡文帝か陳後主の「折楊柳」に和した作のようにも思われる。

※本稿は平成二十九年度科学研究費基盤研究（〇）「言語実験の場としての六朝樂府に関する研究」（課題番号二六三七〇四一〇）の助成を受けたものである。